京都市幡枝採集の古代瓦について
―窯跡資料の紹介―

岡本　健

はじめに

岩倉盆地の西部に位置する幡枝地区（京都市左京区）には、古代瓦窯跡である栗栖野瓦窯が存在したことが知られている。

本稿で紹介する資料は、1960～70年代にかけて同志社大学による分布調査が行われた際に採集されたものであり、栗栖野瓦窯に関連した資料と思われる。この資料群には須恵器・緑釉陶器・瓦などが含まれるが、1971年の概報で図化報告されたのは須恵器のみであった。今後その他の遺物の詳細を報告していく必要があるが、本稿ではさしあたり瓦に限って報告することにする。

１、遺跡の概要

幡枝が位置する岩倉盆地は、京都盆地の北東部に隣接している。東を比叡山、西を本山丘陵、南を松ヶ崎丘陵に囲まれている。盆地内部を流れる長代川・岩倉川は盆地の南部で合流し、さらに高野川、鴨川に合流する。

1929年、木村捷三郎は岩倉南西部における採集瓦をもとに、当地に多くの瓦窯跡が存在することを明らかにした。さらに、これらが「栗」「木工」の文字瓦を含んでいることから、『延喜式』に見える栗栖野瓦屋に比定した[1)]。これを踏まえて1930年には京都府史蹟勝地保存委員会により１・２号窯の発掘調査が行われ[2)]、1934年に史跡指定されている。

1956年の宇佐晋一による本山官山窯・本山遺跡[3)]や、1963年の坂東善平による幡枝元稲荷窯跡[4)]の発見を経て、1971年の同志社大学による分布調査が行われる（後述）が、遺跡の分布図と若干の遺物図面を掲載するにとどまった。1976年には磁気探査などによる確認調査が行われ、新たに６基の窯が確認された[5)]。1985年には指定地外の丘陵東側で発掘調査が行われ、10基の窯が新たに発見された。その際、飛鳥時代の瓦窯から500枚以上の瓦が窯詰め状態で検出されるなどの成果があった[6)]。京都大学考古学研究会は、1970年代から90年代にかけて継続的に分布調査を行い、同志社大学による分布調査よりも詳細な報告を行っている[7)]。1992年の発掘調査では４基の窯が新たに検出されている[8)]。

２、調査の経緯

以下、同志社大学による分布調査の概報[9)]をもとに、その経過を述べる。

1963年、博愛病院（現在の京都博愛会病院）の北側で古墳・窯跡各１基が発見され、同志社大学の森浩一に連絡があった。それを受けて、考古学専攻の学生により付近の遺跡分布図を作成することとなり、２月８日から10日まで延べ50人の学生により集中的に踏査が行われた。踏査の結果、古墳71基、

窯跡15基、散布地２か所、包含地２か所が見出され、遺跡分布図（図１）が作成された。

ただし、同概報によると1963年以前の集中踏査以前に採集された遺物も含めて図化したとある。さらに、現在歴史資料館に保管されている遺物の注記を見ると、1963年よりも後に採集されたものが多数ある。したがって、採集時期はかならずしも1963年の集中踏査時に限定されないようである。さらに、遺物注記やラベル等には幡枝地区内のどの地点から採集されたのか記録されておらず、詳しい採集地点は不明である。

３、採集瓦の概要

採集された遺物はコンテナ16箱にのぼる。そのうち瓦が含まれるコンテナは８箱である。瓦のほとんどを平瓦の破片が占め、それに対して丸瓦が極端に少ない。したがって、建物の屋根を構成していた瓦とは考えられず、窯跡の資料と考えるのが妥当である。以下、それらの瓦のうち軒瓦・緑釉瓦のすべてと平瓦の主なものを報告する[10]。

(1) 飛鳥時代（図２－１、２）

当該期に属する平瓦が２点のみ確認できた。

１は平瓦である。凹面の布目が斜行しており、桶巻造りで製作したと思われる。凸面には格子叩きを有する。このタイプの平瓦は１点のみの出土である。白鳳期に属する。

２には「幡枝宝ヶ池窯 西地点 781022」の注記がある。凹面に布目、凸面に叩き目を有する。叩き



図１　1971年作成の遺跡分布図

目は中心部に 4 × 4 の蜘蛛の巣状の格子を持つ。格子の交角は、約80度で交わる 1 本を除いた全てが約60度である。栗栖野 6 号窯の窯詰め資料も同様の特徴を有している[11]。白鳳期に属する。

(2) 平安時代（図 2 － 3 、図 3 、図 4 ）

3 は平瓦である。凸面に叩き目、凹面に布目を有する。布目は 6 と同じくらい細かく、 9 世紀に属する。採集された瓦のほとんどすべてが、 3 と同様の平瓦の破片である。

4 は軒丸瓦である。複弁蓮華文であり、蓮子は 1 ＋ 5 である。外区は欠損しており、詳細不明である。丸瓦部凹面では糸切痕と布目痕、瓦当裏面において布目痕が観察できる。いわゆる一本造技法である。 9 世紀に属する。同笵資料は確認されていない[12]。

5 は軒丸瓦である。細片のため全体が不明であるが、単弁蓮華文で、内区と外区を区画する圏線が二重に廻る。外区には珠文を配置する。裏面には、瓦当部に丸瓦部を押し込んだ痕跡が観察できる。HT101（NS111）型式に相当する[13]。当該型式は軒平瓦 HT201（NS211）型式と組み、平安宮大極殿と豊楽殿の創建瓦を構成する。窯跡出土資料の同笵関係により、当初は西賀茂瓦窯で用いられた笵が栗栖野瓦窯へ移動したと考えられている[14]。なお、当該型式の笵傷は西賀茂瓦窯の資料には存在せず、栗栖野瓦窯の資料には存在することが指摘されている[15]が、本資料は細片のため笵傷の有無は確定できない。当該型式は緑釉瓦専用の瓦笵であったことが指摘されている[16]が、本資料は施釉されて

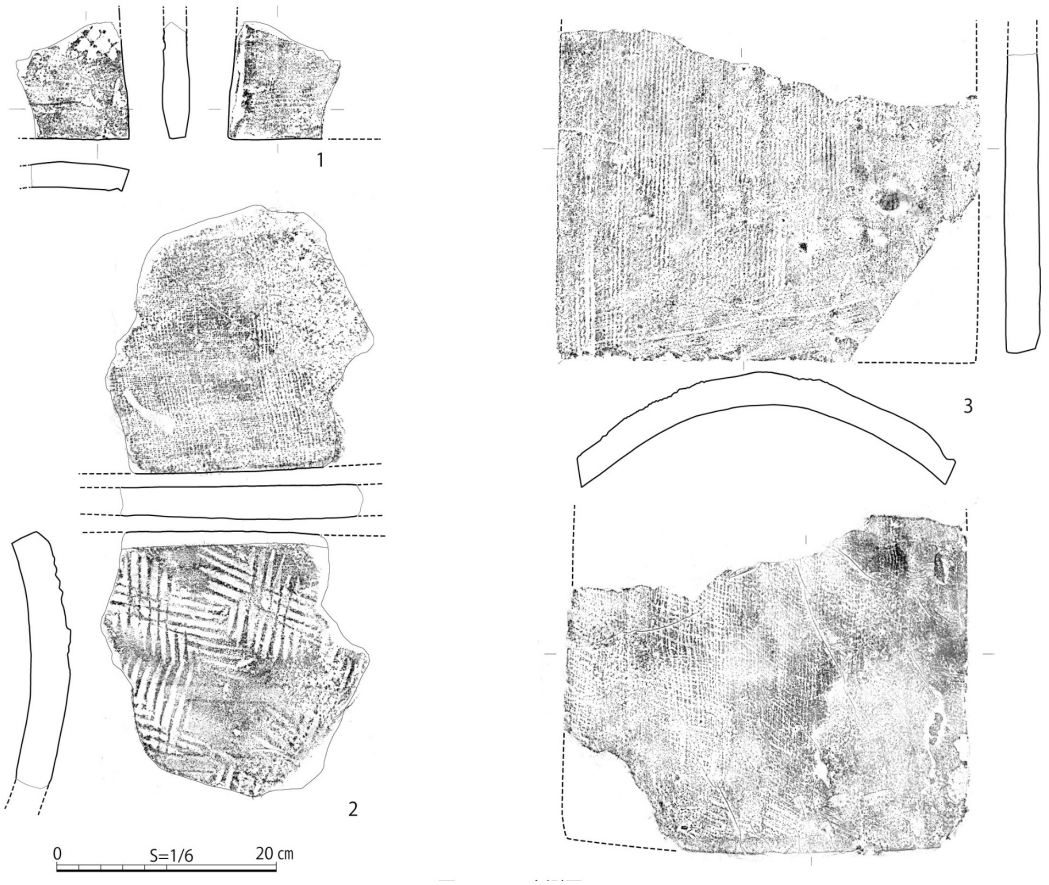


図 2　平瓦実測図

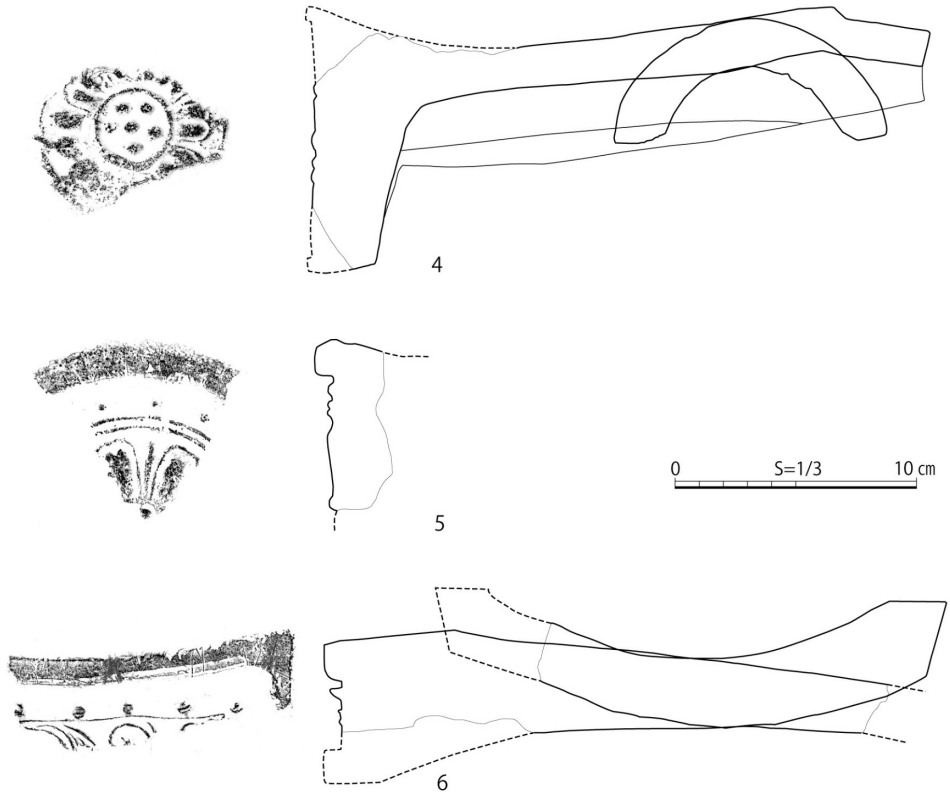


図 3　軒瓦実測図

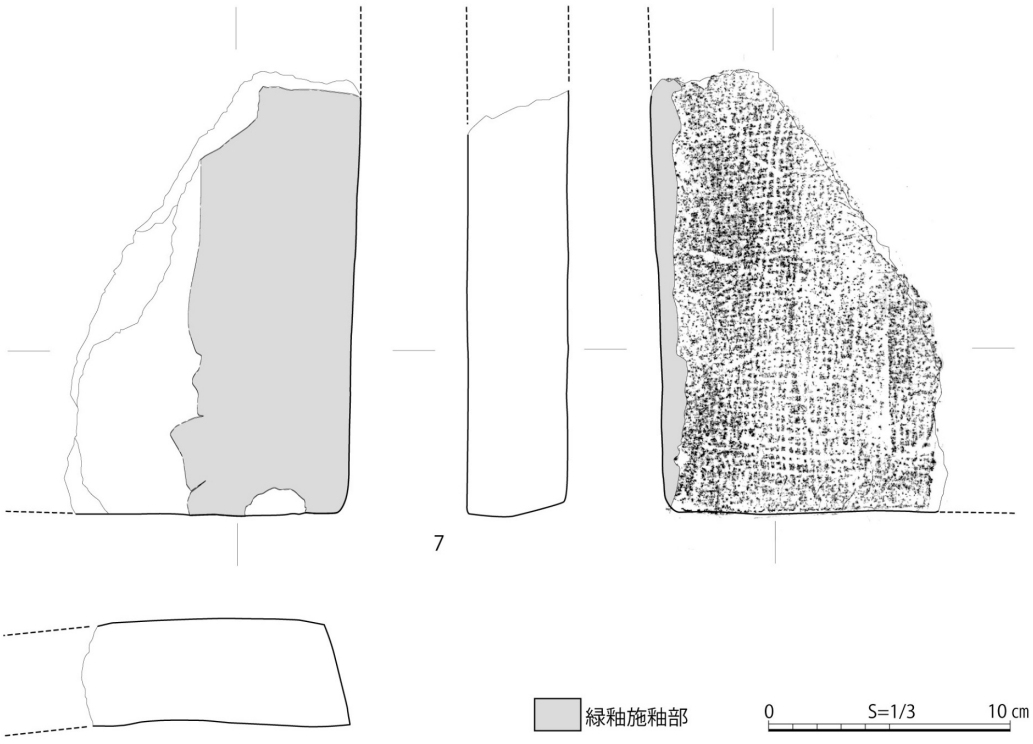


図 4　緑釉熨斗瓦実測図

いない。１度目の焼成の後、施釉を経て２度目の焼成を行う前におそらく破損などの理由で廃棄された可能性が考えられる[17]。８世紀末から９世紀前半に属する。

６は軒平瓦である。瓦当文様には珠文、界線、唐草文を配置する。平瓦部凹面は、目の細かい布目痕を有し、瓦当上縁と側縁を大きく面取りする。平瓦部凸面は全体を縦方向に削る、いわゆる凸面押圧技法である。８世紀末から９世紀前半に属する。

７は緑釉熨斗瓦である。側面に施釉するほか、凸面の側縁に6.5㎝程度、凹面の側縁に１㎝程度施釉する。凹面の全体に細かい布目痕が残り、９世紀に属する。

４、採集瓦の位置づけ

今回報告した採集瓦の年代としては、８世紀末から９世紀、すなわち平安前期から中期初頭に位置づけられるものが圧倒的多数を占める。平安宮から出土した資料と同型式の資料を含んでいることは注目に値し、これらの瓦が平安宮の所用瓦として生産されたことが伺える。さらに、１点のみではあるが緑釉熨斗瓦が確認され、平安宮中枢部の建物の棟を飾る目的で生産されたと思われる。なお、幡枝地区において平安前期～中期の瓦窯跡は未確認であり[18]、今後の調査の進展で当該期の瓦窯が検出されることが期待される。

さらに、２点のみの確認ではあるが、白鳳期の平瓦を若干含んでいることが指摘できる。当該期の栗栖野瓦窯では北白川廃寺所用の瓦が生産されていたことが指摘されており[19]、本資料もそれに該当する可能性をここでは指摘しておきたい。

おわりに

以上、採集資料のうち注目すべき瓦を紹介し、年代の比定を行うとともにその性格に関して若干の考察を行った。その結果、報告した資料のほとんどは平安前期から中期初頭に属し、平安宮造営のための瓦として生産された瓦と理解できた。

冒頭で述べたとおり、採集資料は、瓦のみならず緑釉陶器などの土器・陶器を含んでいる。したがって、それらの資料を含めた全体的様相を論じることで、採集資料の性格がより詳しく明らかになるであろう。その点に関しては別稿に譲ることにしたい。

謝辞

本稿の執筆に際し、植山茂氏から教示を受けた。さらに、本稿の執筆に関連して重要文化財平安宮豊楽殿跡出土品を見学した際には、京都市文化財保護課の鈴木久史氏と新田和央氏、京都市考古資料館の高橋潔氏と丸川義広氏にお世話になった。その際、鈴木久史氏からは資料に即して様々な教示を得た。同志社大学歴史資料館の若林邦彦先生と浜中邦弘先生は本稿の執筆の機会を与えてくださった。末筆ながら感謝申し上げる。

註

1） 木村捷三郎1930「山城幡枝発見の瓦窯址」『史林』15－4、史学研究会、93-111頁

2） 京都府1934「栗栖野瓦窯調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告』

3） 宇佐晋一1956「緑釉土器窯跡本山遺跡とその周辺」『古代学研究』第15・16合併号、古代学研究会、30-33頁

4） 坂東善平1963「京都府幡枝発見の土師器窯跡」『古代学研究』第34号、古代学研究会、28-30頁

5） 京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化観光局1979「史跡栗栖野瓦窯跡」『昭和51年度　平安京跡発掘調査概要』

6） 京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化観光局1986『昭和60年度　栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』

7） 京都大学考古学研究会1992『岩倉古窯跡群』

8） 京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化観光局1993『平成４年度　栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』

9） 文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ1971『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』

10） 年代観については、飛鳥時代に関して 京都大学考古学研究会1992『岩倉古窯跡群』を、平安時代に関して 上村和直・上原真人・前田義明1994「瓦と瓦窯の変遷」『平安京提要』角川書店、617-674頁 を参考にした。さらに、植山茂氏の教示も参考にした。

11） 前掲註６)文献

12） 植山茂氏から教示を得た。

13） 細片のため厳密に同笵照合できたわけではないが、HT101型式と同じ文様構成の笵は現状で１種類しか確認できていないため、同笵の可能性が高い。

14） 網　伸也2005「平安宮造営と瓦生産」『古代文化』562、古代学協会、561-582頁

15） 古閑正浩 2017「平安京初期の造瓦組織」『考古学雑誌』99-1、日本考古学会、50-100頁

16） 前掲註15)古閑論文

17） 緑釉瓦は基本的に２度焼きされると考えられている。すなわち、まず素地（生地）となる瓦を製作し（１度目の焼成)、施釉の後さらに２度目の焼成を行う（鈴木久史2009「平安時代の緑釉瓦」『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第11号、1-18頁)。

18） 京都市文化財保護課2019『京瓦－生産者の足跡―』京都市文化財ブックス第33集

19） 岸本直文1992「７世紀北山背岩倉の瓦生産」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会、195-234頁

図版出典

図１　文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ1971『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』より転載。

その他は筆者作成。